

語り部としての責務

藤原 作 弥

FUJIWARA Sakuya



私事で恐縮ながら、私も満洲からの引揚者である。昭和20年8月9日、ソ連戦車軍団がソ満国境を越えて侵攻してきた際、満蒙草原の僻地、興安総省興安街（現・中国内モンゴル自治区ウランホト）に在住していた私たち一家は、辛くも現地を脱出し、南満洲の国境の町・安東に逃れ着いた。

そこで約1年半の難民生活を送り、昭和21年秋に日本に引き揚げてきたのだが、長じてジャーナリストになった私は、その満洲体験を『満洲 少国民の戦記』（新潮社）と題するノンフィクションに綴った。それは、祖国に帰る日を夢見ながら、敗戦国民の日本人同士、愛と希望をもって互いに助け合いながら国境の町で辛酸を乗り越えた記録である。

だが、その本を書き終えたころ、ガンといきなり頭を殴りつけられたような衝撃を受けた。

私たち一家は無事、日本に帰還し、戦後の復興から高度成長を経て飽食の時代といわれるほどの物質文明を享受したが、同じソ満国境近くの興安街に在住していた日本人には、筆舌に尽し難い苦難を味わった人々が大量にいたことを、取材の過程で知ったのである。

私たち一家は昭和20年8月10日午後、最後の貨物列車に飛び

乗り、ソ連戦車軍団の牙（キャタピラ）から逃れることができた。だが興安街東部地域に在住していた日本人約1200名は逃げ遅れ、8月14日、近くのラマ寺・葛根廟の近くでソ連戦車軍団から一斉射撃を受け、約800名が虐殺され約200名が自爆、服毒などで集団自決した。「葛根廟事件」といわれる大惨劇である。

実は同じころ、その近くでもう一つの悲劇が起こっていた。ウランホトの西方に入植していた「第13次興安東京開拓団」（東京荏原開拓団）の避難集団約800名の運命である。羽田澄子さんのドキュメンタリー映画「嗚呼 満蒙開拓団」に登場する飯白栄助さんもその一人である。

この日本人開拓団避難団を襲撃したのは中国人の匪賊集団。広大な麻畑の中で起こったその大惨事も、葛根廟事件と同じ阿鼻叫喚の地獄絵図だった。地名から「双明子事件」と呼ばれる。二日にわたる襲撃で、800名の団員中300名以上が殺戮された。今やこれまで——と青酸カリを仰いだり、互いに短刀で刺し合ったりした集団自殺の結果、生き残った人は約300名だった。

私になぜ「葛根廟事件」や「双明子事件」を知っているかといえば、二つの事件とも私が住んでいた興安街在住者が遭遇した悲劇だったので、ノンフィク

ションにまとめるため、開拓団の生存者の話を聞き、3回にわたり同地を訪れ、取材・調査したからである。

私自身、現地脱出が一日遅ければ、どちらかの事件に巻き込まれていた可能性は十分ある。8歳の命を草原に落としていたかもしれない。残留孤児の運命を辿っていたかもしれない。これまで、ひとり生き残ったことに一種の後ろめたさを持って生きてきた。

映画監督・羽田澄子さんも私同様に満洲育ちの引揚者だが開拓団の人たちのような苦労は味わわなかった。しかし、羽田さんも私も共にたまたま運命の明暗の〈明〉の道を歩み、生き残った。ジャーナリストの私はペンで時代の証言をノンフィクションに綴り、羽田さんは映画作家としてドキュメンタリー・フィルム「嗚呼 満蒙開拓団」の形にまとめあげた。それが生き残った私たちの語り部としての責務と考えたからである。

映画の終りの字幕に羽田監督自身のナレーションがオーバーラップする。「…こうした犠牲の歴史の上に現在の平和が築かれました。満蒙開拓団で生き残った人々は言います。日本は、この平和を大切にしなければならぬ——と」。

（作家・元日銀副総裁）